

第 4 回

知恵の時代の都市新生研究会

平成12年11月2日(木)

経 済 企 画 庁

第4回 知恵の時代の都市新生研究会

議事次第

日 時 平成12年11月2日(木)

10:30～12:30

場 所 経済企画庁官房会議室

(708・709号室)

1. 開会

2. 「魅力ある都市づくり」について

・委員発表「ITを活用した夢のある都市の創造」(A委員)

「IT革命と都市」について

・委員発表「情報化と都市」(B委員)

3. 今後のスケジュールについて

4. 閉会

(資料)

資料1 知恵の時代の都市新生研究会委員名簿

資料2 A委員発表資料

「ITが及ぼすビジネスモデルへの影響とそれに伴った都市・生活形態の変化」

資料3 B委員発表資料 「情熟都市(仮)」

資料4 今後のスケジュール

資料5 第3回研究会議事要旨

(出席者(敬称略))

(委員)

小林 重敬(座長)、浅見 泰司、市川 宏雄、門野 史明、神藏 孝之、塩谷 隆英、
谷岡 一郎、藤 賢一、西村 清彦、八田 達夫

(経済企画庁)

小野政務次官、中名生事務次官、坂官房長、牛嶋総合計画局長、永谷審議官、塚田審議官、
藤塚計画課長他

知恵の時代の都市新生研究会委員名簿

○委 員（１５名）

座 長	小 林 重 敬	横浜国立大学工学部教授
委 員	浅 見 泰 司	東京大学大学院工学系研究科助教授
"	安 藤 忠 雄	東京大学大学院工学系研究科教授、建築家
"	市 川 宏 雄	明治大学政治経済学部教授
"	門 野 史 明	株式会社東海総合研究所代表取締役副社長
"	神 藏 孝 之	イマジニア株式会社代表取締役社長
"	坂 村 健	東京大学大学院情報学環教授
"	佐 藤 雅 彦	慶應義塾大学環境情報学部教授
"	塩 谷 隆 英	総合研究開発機構理事長
"	白 石 真 澄	株式会社ニッセイ基礎研究所主任研究員
"	谷 岡 一 郎	大阪商業大学学長
"	藤 賢 一	エフ・ジェイ都市開発株式会社代表取締役社長
"	永 瀬 伸 子	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科助教授
"	西 村 清 彦	東京大学大学院経済学研究科教授
"	八 田 達 夫	東京大学空間情報科学研究センター教授

(座長) ただいまから第4回知恵の時代の都市新生研究会を開催させていただきます。

本日は委員の皆様方にはご多忙の中お集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

本日は、お手元にお配りいたしました議事次第にございますとおり、「魅力ある都市づくり」及び「IT革命と都市」について検討を行うということで、A委員・B委員に発表いただきます。

まずはA委員より、「ITを活用した夢のある都市の創造」というテーマで発表させていただきます。それでは、A委員、お願いします。

(A委員)今日は、ITが及ぼすビジネスモデルへの影響とそれに伴った都市、生活形態の変化についてお話ししたいと思います。

まず、ITが及ぼすビジネスモデルへの影響についてですが、1つ目の事例として世界的に有名な百科事典の発売元であるブリタニカ社の例があります。ブリタニカ社は、従来、訪問販売による収益を柱としていたのですけれども、販売収入の激減に悩まされていました。ところが、新たに就任したCEOのもとで百科事典をウェブ上で無料開放する一方、その隣にバナーとバナー広告を出した。百科事典を売る企業であるより、バナーポータルの広告代理店という形にして、教育関係の会社を中心にして広告収入モデルに変わっていった。本社もイギリスから東海岸の方に移すという形で、全く企業のモデルを変えることによって再生したということですが、これがITが企業自体を変えてしまった一つのモデルになると思います。

2つ目の事例として象徴的だったのは、今から三、四年前になると思いますけれども、マイク・タイソンという当時ヘビー級で世界ナンバーワンのボクシングチャンピオンがいましたが、90秒で当時の為替換算で36億円のファイトマネーを得たということで話題になったラスベガスの会場で行われた試合があります。

これはどう考えても合わない話なんですね。100ドル入場料を払った人が5万人集まっても5ミリオンにしかならないところに、彼に30ミリオンのお金の支払を可能にしたのは、スペシャルな番組を見る者に対して時間当たり30ドルチャージするという形のペイパービュー方式が挙がってくると思います。30ドル払った人が世界でどれぐらいいたかということ、数百万人規模がペイパービューでカウントされるということで、マイク・タイソンに上がったペイパービューのロイヤリティー収入として3分の1払っていたと思いますけれども、払っても成り立つモデルが誕生してくる。

ということで、興業の世界という形の部分も、単純に会場に行ってチケット代を払って、その総売上部分、あるいはせいぜいテレビの冠スポンサーがついて、あとは広告主がそれぞれ東京ドームみたいな形で看板を出していくという形の商売から、ユーザーが直接ペイパービューで課金してくる。アメリカの場合、ITの中でケーブルテレビを引いている割合が圧倒的に多いことがあって、こういう形のモデルが可能になってくるということで、書籍販売、本屋さんの世界も変わってくるし、出版社の形態も変わってくるし、興業の世界も変わってくるということが2つ目だと思います。

3つ目に、国内の中で事例を取り出してみますと、自宅にしながらeトレード、株式の売買をするという形のモデルが出ています。大方の会社は、マネックスから始まって、大体赤字になっているという感じのことになると思います。野村證券も大和證券も単体だけ取り出すと収益が上がっていないということになるわけですが、ここ二、三年の中で圧倒的に収益を上げてきているのが松井証券の松井社長だと思います。

ここはなぜそんなに収益が上がったのか。松井証券というのは、明治4年に創業していて、100年以上といっても中堅以下の証券会社でありましたけれども、オーナー系として歴史を持っているというところがあります。彼が下した決断は、最初に述べましたブリタニカ百科事典のブリタニカが営業マンをゼロにするという形のことと同じで、証券の営業マンをゼロにするということをやった。

支店をもって販売もやるし、新たなインターネット投資もやるという形のダブルでやるとついていかれなくなるんですけども、ブリタニカの事例もそうですが、大胆にどちらかを選択してしまって収益モデルを変えてしまう。結果としてどういうことが起きたかというと、中小零細証券のたぐいだった会社が、今、株式が前後していますのであれですけども、少なくともことしの6月くらいだと1日のトレーディング高が150億という形で、20日換算で3,000億、1年間で3兆6,000億、規模としてはなくなった山一証券と国際証券くらいになってきているということです。幾つかの事例があるんですけども、国内でモデルを変えてくるという感じの部分でいくと、そのあたりのところが出てくるだろうと思います。

一つ目でお話しさせていただきたかったことは、ITというのは、個別の技術、HTMLがどうなるかとか、IMT2000がどうなるかというカルコムのことより、モデルを変える力を持っているということで見えていった方がおもしろいのかなという感じがしております。一般的には、アメリカで二、三年前につくられた図式でいくと、ITについてビジネ

スモデルというのは4つある。

AOL型、お客さんがそれぞれ19.99ドルずつ持ってくれる会費収入モデル。

2つ目は、ヤフーのように、たくさん検索ポータルをつくって、ユーザーがやってきて、そこに広告を張っていくという広告代理店型のモデル。

3つ目は、今いつキャッシュアウトしてもおかしくないような状態になっていますが、アマゾン・ドット・コムというネット上の本屋さんに代表されるコマースモデルですね。ものを動かしてやるモデル。

4番目は、コミッションモデルといいまして、eベイという会社は、自分の要らないものを会場に出して、会員同士でオークションをやってくれ、それに対してコミッションを取っていくというものです。

多くは会費収入とコミッションの組み合わせになりますけれども、これにだいが複合がついてくるとは思いますが、旧来型のオールドエコノミーのモデルから、違うお金の取り方があるということをニューエコノミーの理論が始まるときに出してきて、最近、その部分は株価については怪しくなっていますけれども、ビジネスのモデルを変えたということについては依然生きているのではないかというふうに思っております。

もう一つ、今から十数年前、私どものアメリカ人のパートナーは10人おりまして、そのうち半分の方がナスダックに公開されてお金持ちになっていったということですが、ITがアメリカで明らかに動き始めたのは95年からだと思いますけれども、どういう感じの生活形態をしているのか。ナスダックにゴー・パブリックした後の彼らの生活を見ると、シリコンバレーでいくと、そこからすぐ後背地にモンレーとかカーメルまで行かなくてもギルロイがありますし、住んでいる場所は週3日くらいですね、モンレー、カーメルは海岸線のところですけども、そこに週3日なし4日くらいいて、自宅といっても相当大きなスペースになりますが、自宅に必ずオフィスを持っている。結構早い時間に起きて海岸線を犬を連れて散歩し、オフィスに9時くらいに入って、専用線、ケーブル、モバイル、基本的な設備はアメリカは通信コストが圧倒的に安いですから、ほとんどその部分でいけるような感じになっています。

それから、前回、C委員が言われていましたように、コンテンツ系で打ち合わせをきちんとしなくちゃいけないときにはサンノゼに出ていくことになりますが、サンノゼの最大の特徴というのは、空港から車で30分以内にほとんどの企業が散らばっている。スタンフォードあたりのオラクル、サンマイクロ、あの辺からパークレーサイドまで含めた一つの

エリア、その辺に時間がかからずにほぼ集積している。

一方で、パークレーとかスタンフォードサイドまで来ると、ソーサリトというリゾートのような住宅街のような、住宅からヨットが出ていくようなところにいる。これはインベストメントバンカーがすごく多いと思いますが、シリコンバレーに投資するベンチャーキャピタルの連中は、UBSの連中たちが入っているビルを中心として、ここに3日くらいいて、こっち側に4日くらいという形です。

基本的には、95年くらいの西海岸のサンフランシスコないしサンノゼ、あるいはロスのオレンジカウンティでもいいですけども、集まっている人たちと今の人たちと何が違うかということ、明らかに顔つきが違うというか、成功できるんだという感じ、こういうふうになりたいという形のモデルが結構散らばっているわけです。四、五年くらい前まで自分と同じようだったのが、朝は散歩し、ビジネスをやりながら楽しそうに生きている、そういうモデルが目の前にごろごろしている、自分もそうになりたいという感じの部分が物すごく強いんだと思います。

結果的に、それ以前のところをひっくり返してみますと、アメリカが絶不調だった78年から80年前半、カーターからレーガンに変わる切れ目あたりの相当疲弊してくる時代は、こういうふうになりたいなと若いジェネレーションが思うモデル像が余りなかったという感じが、ソーサリトに行っても、カーメルでもモンレーでもオレンジカウンティでも、今のアメリカではモデル像がごろごろしているという感じです。

圧倒的に変わっている価値観というのは、ただひたすら忙しいだけで成功していく、個人の時間はほとんどないことをハッピーだと思わない。そうじゃなくて、一義的には自分で自分の人生を生きている、時間的にゆとりがあって、かつ金を稼げるモデルを持っている、ITが出てくる前はそれが可能じゃなかったんですね。

専用線で結んでいて、かつコストがめちゃくちゃに安くて、しかも送れる画像データが極めて高品質で安定している、セキュリティもかかっている、この段階になって初めてソーサリトにいながらダウントウンで仕事をやる状態と同じで、行ったり来たりできるというこの部分が可能になって、ただひたすら70まで忙しく働き続けてお金持ちになったというモデルでは人を引きつけられない。ただひたすら夜中まで働いて頑張りましたねということでは、20代の人でも30代の人でも引っ張れない、10代の人でも引っ張れない、そういうモデルが西海岸に行くところごろごろしている。それを可能にしたのは、経営モデルを変更したのと同じくインフラを含めたITの技術バックグラウンドではないのか、結果的

にそれが個人の価値観を変えて可能にしているということではないかと思います。これが2つ目になります。

3つ目は、私がサンフランシスコからシリコンバレーに行き始めたのは今から15年前の85年くらいからで、かなり長い年数いるようなことになっているんですけども、何が圧倒的に変わってきたか。マイクロソフトのビル・ゲイツは有名ですけども、ビル・ゲイツ1人でマイクロソフトができていたわけじゃなくて、あそこは会社の敷地をキャンパスという呼び方をしていますが、中に半分以上、アジア系の優秀なテクニカルメンバーがいます。オラクルでも、サンでも、シスコシステムズでも全く同じような現象で、次から次へと優秀なアジア系の技術者が世界じゅうから集まってくる。

さらに言うと、アメリカの集め方のすごいところは、台湾にしる、シンガポールにしる、香港にしる、最も高い教育を受けた優秀な連中で、最近のソウルと日本のITの格差というのは、高校まではソウルで、その後はバークレーとか、スタンフォードとか、その形態が物すごく多くなってきています。かつてソウル大学が韓国で一番優秀な人脈がつくれるという場所だったけれども、今は40から下の部分でソウル大学の有効性は極めて低いです。バークレーなのか、スタンフォードなのか、ハーバードなのか、プリンストンなのかという形になって、作り出している人脈形成図が全然違ってきていますが、この仕組みをつくっている最大の部分というのは、アメリカの国設立以来の神話じゃないかなというふうに思います。

もともと何にもないところにイングランドから人がやってきてつくった国なので、次から次へと世界じゅうから人を呼び寄せる仕組みをつくらなければいけない、その神話がアメリカンドームじゃないか。アメリカに行くとアンドリュー・カーネギーみたいな金持ちになれる可能性があるとか、アメリカに行くとマリリン・モンローとかマドンナみたいないい女がいるとか、ストーリーの作り方が非常に巧みだった。幾ら食い詰めても家族、家を捨てて、はるかなる海を渡って、かつてはヨーロッパから来た、今は圧倒的にアジアから来る、最近でいくとエチオピアとか中近東からガンガンやってくる、東欧からやってくるということですけども、アメリカンドリームという確率論でいくと宝くじの世界に近い感じで、そんなにいっぱいやってきても大部分はポートピアブルになるんですが、その神話を持っている。

その神話を持っているところに、西海岸でいけばサンフランシスコにバークレー、スタンフォードがあって、もともと教育された優秀な連中が来た上に、彼らを育てる装置を持

っている。日本の場合、あまり教育されていない労務者になり出すような不法移民がやってくる。アメリカのIT関連の技術者の圧倒的な強さは、国のコストの中で教育するという部分に物すごい金がかかるわけですが、ほとんど自分たちは投資していない。投資していないけれども、優秀な者を集める仕組みを持っていて、よその国がつくってくれた最も優秀な層を引きつけてしまう。パークレーでいきますと、スタンフォードの場合も大体同じですが、学費が免除、奨学金を1万5,000ドルくらいつけている。1万5,000ドルの算出基準は、それで一応生活ができるんですが、この手のたぐいのものがいっぱいあるということで、教育された優秀な者、特にテクニカルの部分で集めてしまう。

アメリカ、時価総額を含めて近年、物すごい勢いで富がふくらんできているんですけど、この中身をよく見てみると、アメリカに生まれたアメリカ人がつくっているのか、それともほかの国からやってきて、途中でアメリカ国籍を取ったアメリカ人がつくっているのか。ビル・ゲイツは例外ですが、ほとんど自分の国を捨ててきて、物すごく賢い者が猛烈なシステムの中で勉強した、そのところに決定的な違いがある。だれによってサンフランシスコはあんなにきれいになったのか、だれによってニューヨークはあれだけきれいになったのか、実は他国から呼び込んだ優秀な10代とか20代の連中によって豊かになってきているという非常に効率のいいやり方をしているんじゃないか、というのが私が見てきた印象です。

それから、少し話が変わりますが、例えばロックフェラーの三女がやっていることは、サンフランシスコから北へ90キロのところでひたすら絵を買ってあげるということをやっています。そんなにきれいな身なりじゃなく、普通の服を着て、絵を自分の金で買っている。そうすると何が起きるかということ、それを聞きつけて、自分の絵を買ってくれないかと世界じゅうの画家がその地域に集まってくるわけです。大事なことは個人の金でやっているということで、彼女自体もだんだん目利きになってきますし、そこに行けば自分の絵を買ってくれるかもしれない。彼女に買ってもらう、さらに評価されると、今度は画商につないでもらえる可能性も出てくるということで、一大アーティストタウンになってくる。

日本の画商との圧倒的な違いというのは、日本は、不動産屋さんか、金融屋さんか、パチンコ屋さんの変形バージョンが画商さんをやっているというのが例ですけども、純粋に絵が好きで、金持ちだった人がボランティアでやっている、結果的に画家が育つ。

たくさんのシリコンバレーモデルの企業が出ていますけれども、日本のベンチャーとア

アメリカのベンチャーの圧倒的な違いは、アメリカのベンチャーは技術、日本のベンチャーは基本的に安売り系の変形、ざっくりいうとそんなことじゃないかなというのが私の印象です。なぜ技術があるかという、スタンフォードの PhD が 100 人集まってつくった会社という、もともと優秀なわけですから出てくるという流れになってくる。

重要なのは、日本でもベンチャーキャピタルという言葉がありますけれども、アメリカのベンチャーキャピタルと日本のベンチャーキャピタル、使っている用語が同じだけで、中身は全く違うものであるということです。日本のベンチャーキャピタルというのは、基本的には、銀行の人がたまたま出向で行かされちゃったとか、証券会社の人にとりあえず出向で行っているとか、ベンチャーキャピタリストになろうとしてやっている人たちとは全然人種が違います。

クライスマン・パーキンスから始まってアメリカの出てくる人たち、シリコンバレーをつくることにコントリビューションがあった初期のメンバーの人たちの多くは、最初は自分でベンチャービジネスのプレーヤーだったケースがすごく多いです。プレーヤーで成功してお金持ちになっている。私がアメリカの企業と交渉していてすごく思うんですけども、現役でトップをやっているときのアメリカ人というのは、非常にタフで、悪魔のような感じのアメリカ人というイメージで、非常に手ごわい。ただ、ゴーパブリックしてお金ができる後は、非常にいい人という感じのボランティア精神が出てくる。

カーネギーの自伝を読んでいて思い当たるのは、本人も書いていますけれども、彼は 66 歳までは守銭奴だった。鉄鋼業自体、当時の鉄鋼業は労働集約産業で、絶えず労使紛争をやっていたして、「66 歳のとき、向かってくる労働者の顔が自分のおやじの顔に見えた」という表現をしていて、そこから全米に 2,000 の病院を個人のお金で寄附する、図書館を全米に寄附するという感じでがらっと変わるんですけども、あれが象徴例じゃないかと思います。世界じゅうから集めた優秀な若い連中を教育する仕組みがあって、かつそれにサポートするボランティア、投資家なんだけれども、育ててあげよう、その部分が出てくる。

ビジネスで成功した人たちがバークレーのビジネススクールのプロフェッサーをやっているケースとか、スタンフォードで先生をやっているケースとか、フルタイムじゃないですけども、すごく多いと思います。大学と企業の間を行ったり来たりしていますから、学生のチームからいうと、自分も投資をするし、アドバイザリーコードに入るし、さらに次の投資家を紹介していくという形で、まち全体が企業みたいな形態になっていく。

結果としてどういう形のことが生まれたかということ、間違いなくシリコンバレーを中心としたIT企業群が2,500万から3,000万人くらいの雇用をつくったというのは事実です。一方、昔からの代表的なオールドエコノミーの方は、1,500万から2,000万人のリストラをした、リストラをしないまでも、もともと10万ドルくらいの年収だった人がマクドナルドで3万ドルくらいで店員をやって働いているというケースをつくり出して、片一方で雇用を吸収したということだと思います。

ITというのは、通信コストが20分の1くらい、あるいは50分の1くらいになること、安定性が高くなること、高品質のデータが送れること、幾つかのことをワイヤレス・インターネットでやるのか、PC型のインターネットでやるのか、大別するとこの2つだと思いますが、重要なことは、その技術が出たときにまち全体で一つの仕組みを持っていたところが圧倒的に強くなってくる、そういうことではないかというふうに思います。

サンフランシスコのまちの中で高級レストラン等々を見ても、ミーティングは英語でやっていますけれども、圧倒的に台湾の人と香港の人とシンガポールの人とマレーシアの人、それにインベスターとしてアメリカ人が入っている、その形態がすごく多いです。プレーヤーは国を捨てた人たちにやらせた方が効率がいい、自分たちは前段階、もともとは移民の国ですから、1世代くらい前に来て富を形成した人たちは、今度はインベスターに徹しよう、テーマはITだというような形式で非常にうまく回っている。富が大量にできたので、結果的にアメリカのまちは10年前に比べると圧倒的にきれいになりました。

引きつけるモデルとしては、ただひたすら70まで一生懸命働くというモデルじゃないですね。リゾートオフィスにいて、ヘッドクォーターがあって、その間は1時間くらいという感じで、自分の人生を楽しみながら勝ち方の方程式、そのバックグラウンドはIT技術であるという形態ではないのかという感じがいたします。

最近のITの中で影響を与えそうな部分というところでは、96年から多量に投資が起きた業界にITを使った教育サービスの会社があります。一番有名なのは、ジャンクボンドを発明したマイケル・ミルケンという人がいまして、彼は途中でつかまって刑務所に送られていくんですが、日本の評価とアメリカの評価は全く違っていて、CNNから始ってアメリカのかなり多くの企業は、ジャンク債を発明したことによって立ち上がってきた。世界の証券市場でジャンク債がないのは日本だけかもしれないんですが、それでナスダックとマザーズがうまくいかない、真ん中のジャンク債マーケットを除いて上と下だけやっているのどううまくいかない。

マイケル・ミルケンを筆頭に多量の金を投入したのがIT教育サービスの部分で、大学の講義をネット配信、プリンストンのビジネススクールでいくと年間4万ドル払わなきゃいけない、2年間拘束させられるから、10万ドルくらい最初に蓄えておかないとやれない。よく考えると、ビジネスコースの中でマーケティングだけとか、ファイナンスだけとか、これだと4,000ドルで、ネットで自分の時間の中でやれる。原則はその部分、メールですからQ & Aで答えてくれる、24時間サポート体制ができているという形の仕組みが96年秋から始まっていると思います。

それがアメリカで今、花開いてきているのは、去年の暮れにスキルソフトという会社がIT教育で1番目に公開して、ことしの2月にデジタルシンクという会社、これはIT教育を主眼とする会社ですが、これが花開いていくという感じで、実務教育を除いてIT教育でやれる部分は、今まで4万ドルかかっていたところが10分の1くらいのコストでできる。大学の方は、コロンビア大学が有名かもしれませんが、かなりの講義をこれで配信していこう。早稲田のバーチャル・ユニバーシティー構想は近いかもしれない。同じ場所に同じ時間、そこらじゅうから交通費を払って1ヵ所に来る、企業の研修教育もそうですけれども、この形態をこれからもする必要があるのだろうか。集合教育でやる部分とネット教育でやる部分、検定試験の導入の仕方とQ & Aのメールの作り方がポイントですけれども、この部分はできるんじゃないだろうか。

ソニーのITのアドバンスコースをつくっておられるのは、東大で江崎先生についている36歳の助教授の方がいらっしゃいます。彼は、ドクターを出て東芝に入られて、研究所時代にルーターを開発しています。シスコのルーターに近い形の原型で、日本初のルーターを開発した人ですけれども、東大にスカウトされて助教授を始めた。ソニーといえども、TCP/IP、インターネットの技術は日本では反主流でしたから、やっている人の数は正味250人、メーンは60人しかいない。反主流だったがゆえに非常に面白いような発展で、アメリカと圧倒的に違う。ソニーのアドバンスコースだけでやっていると年間600人しか見られない。これをITの形に直して配信する方式を考えて、検定試験の仕組みが変えられればどうなるだろうかということで、2000年に入ってようやく日本でも同じような試みが出てきている。教育とITというのは一番近い関係に出てくることになってくると思います。

通信の世界の中で日本が全部負けているかというと、ワイヤレスの世界だけは日本が強くなって、最近ではiモードが圧倒的に強いという形になるんですけれども、技術の世界

でファーストムーバーとセカンドムーバーという考え方があります。アメリカは、公衆電話から始まって、自宅に引いたアナログの世界で圧倒的に強かった。投資をアナログの世界でやっちゃったものですから、セカンドムーバーの走るデジタル世界のときに、A T & Tの背景もあって投資するタイミングを間違えてしまったということで、結果的に日本が強くなっていった。

それと、パケット通信網の考え方というのは、ある程度人口が集積した国でないといけませんので、アメリカみたいに国土が広くて、人がポンポンといる、そこにパケットを引いてくるとコスト的に全然合わないという考え方がありますので、大別的には日本、香港、中国の沿岸州、台湾、このあたりがワイヤレス・インターネットが強くなってくるんじゃないか。全部負けているというわけではなくて、ワイヤレス・インターネットのところは強い。

ただし、次にサードムーバーという話が出てきますが、今の単純なiモード方式から次世代に入ったとき、また順番が入れかわりますので、ここの段階になるとどうなるか、これが2002年くらいからの話になってくるのかなという感じがしております。そのあたりが次の部分なのかなと。

最後にまとめさせていただきますと、ITは、私の感じでは、ビジネスモデルを変える技術だったということが一番ポイントであって、それを使って最もうまくいったのがアメリカの西海岸と東海岸と両方あって、やり方というのは、構想力とストーリーをつくってある。自分たちの人材でやったわけではなくて、集めて教育して、アメリカ人は投資先を選んできた。結果的に、かなりのものを借りて、使った富でライフスタイル、リゾートオフィスとの組み合わせでこういう感じのものがいいんじゃないかということを打ち立てる。ソウル大学に行くはずだった人たちがアメリカに来たり、台湾の連中が台北大学じゃなくてアメリカに来始めたというのが典型例だと思いますけれども、もう一回そのストーリーで富をつくってしまう。

これからおもしろくなりそうで、日本に合っていそうな形というのは、IT教育サービスのところで、アメリカで3,000億、4,000億の教育産業はありません。ベネッセとか、公文という会社は出てこない、こちらサイドの部分は十分チャンスが出てくるのではないかという感じがしております。

以上3つのことを話させていただいて、終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

（座長）有益なお話をありがとうございました。

それでは、ただいまA委員からお話しいただきました内容についてご質問なりご意見があれば出していただきたいと思いますのですが、いかがでしょうか。

（政務次官）A委員の提起の中で一番大きな問題提起というのは、アメリカンドリームというものが存在して、そのもとでいろいろな取り組みが行われてアメリカ社会が構成されてきた。その中に情報のいろいろなシステムとか、起業家のスピリットとか、こういうものが組み込まれてうまく動いてきている。こういうような話、これが日本社会で今、一番問われ始めている問題のような気がします。日本は戦略性がないということをいろんな分野で言われるけれども、それはジャパニーズドリームというものが判然としていないところから、戦略を組もうと思っても組み上げることができない、こういうふうな問題だと私は理解しています。

そこでご質問というのは、1つは、アメリカンドリームというのは果たしてだれかがつくったものなんだろうか。むしろアメリカを開拓する、あの広大なところをだんだん広げていきながら、しかも統治しなきゃいけない必然性の中で、映像メディアというものを中心にして、一つのイメージ的なアメリカ国民を形成するということで自然のうちに生まれてきたものなんだろうか、この点についてのご見解はいかがでございましょうか。

（A委員）私はハリウッドを思うんですけれども、ハリウッドというのは、上の方はユダヤ人のたまり場みたいなところですよ。西部劇の話は昔聞いたとき、西部劇というのはアメリカの魂の原風景をつくる話ですよ。インディアンと開拓する人たち、インディアンはいつも悪いやつになっているんですが、開拓していく魂をつくっていくあのストーリーというのは、アメリカの思想を構成する上で、特に映像メディアで普及させる上で、非常にうまくつくられたストーリーだったと思います。

映像メディアというものを使ってつくって、家を捨ててばらばらな国から来た人を束ねるためには、どうしても神話が要りますよね。その神話を一気に広げるのに、当時としては映画が最大のメディアだったと思います。そこで何をやるかを考え出した人たちがユダヤ人だったというのが非常におもしろい、彼らも国を捨ててアメリカに来た人たちだった、そこで出てきた。

（政務次官）現在もそういうグループが存在しているんでしょうか。

（A委員）グループというか、基本的にはばらばらで個人がやっていて、結果的に集合体になっている。アメリカは、国土はでかかったけれども人は少なかったですから、人を呼

び込まないといけませんが、恐らくだまして連れてきたんじゃないかなというふうに私は思うんですね。どう考えても、「アメリカに来ればおまえの住んでいる家の 10 倍くらいの家に住めるよ」と。アメリカンドリームの特徴がホワイトハウス、あれがアメリカで一番大きい家だというストーリーだと思いますけれども、ああいうストーリーの作り方をし、肉が食えるようになるとか言うわけですね。

先に男が来ますから、今度は女性を呼び込まないと話が成り立たないので、「こっちに来るといい男がいる」とか話をつくっておくわけです。それは必然的に個人が考えた知恵じゃないか。ある程度食えるようになってきたので嫁さんでも欲しい、アメリカ人で嫁さんはいないということになったとき、ヨーロッパからだまして連れてこよう。だますわけじゃないけれども、とりあえずいいことを言いますよね。それと映像メディアでつくられた部分が途中で合体する。

アメリカンドリームというのは、万に一つかもしれないけれども、サクセスストーリーは実際にあるわけです。時代時代でメーンの業種は違いますが、あらゆる場所でサクセスストーリーは生まれているわけですね。

アメリカのすごくすてきなところというのは、60 半ばくらいになってふらふらしているホームレスみたいなやつでも「今から金持ちになるんだ」と平気で言いますし、ナイトクラブへ行っても、女性が昼はボートかなんかに行っていて、夜は学費稼ぎでやっている。あるいは、そうでなくても、ここで金持ちの男を引っかければ一気にのし上がれるみたいな楽観性がすごく大事だと思うんですね。

（政務次官）もう一点だけ質問させていただきたいと思うのは、アメリカのそのやり方が問題点として見えてくるのは、外見的な成功を中心にやっていくがために、内面の部分が置き去りにされて、それが心の面でのアメリカにおける混乱みたいなものに結びついているように見えるところがある。夢の中に生きている人たちはその中で十分充実感を持って生きていると思うけれども、それから一たん外れてしまうと、自分自分の存在価値が否定されるような思いになる、内面的な部分で充実感が得られなくなるというような現象が見えているのが 1 点。

2 つ目には、共通の敵を見出したときにはそこへ向かって心が集まるけれども、そうでないときには内的に結びつき合いながら調和を生み出す仕掛けがアメリカ社会になさそうだという感じがいたしますね。

（A 委員）アメリカが精神的に悪かった時期は、ベトナム戦争後遺症の 67～68 年から 70

年に1つと、アメリカがすごく弱くなった78年から80年、ドルの切り下げくらいまで、私の感じですが、あの時代は一番ぐちゃぐちゃだった。それから、日本がバブルで絶頂期、向こうが悪かったとき。それと今とを比べると、全体的に富ができたので、下が底上げされちゃっている部分があるような感じがしています。一番悪かったときに比べると、ニューヨークの地下鉄はかなり安全になったし、ハーレムでアポロン劇場あたりをふらふら歩いていてもそう怖くないという形態になってきました。

おっしゃるように、ぐわっと広がると、モデルが変わっただけでもトラブルは当然ながら起きるんですね。最初のブリタニカの話でも、200人くらいの営業マンの人はさようならということになっちゃったわけです。

ただ、私、すごく思うんですけども、ブルーカラーのマニュファクチュアリングについて日本は成功したと思いますが、ホワイトカラーのマネジメントについて日本が成功しているかどうかというのは、非常に疑問なんですね。少なくともアメリカの人事システムの方が個別個別の人間に対して手厚いというか、よく考えているという感じで、これくらいやった者に対して、成果をこう見て、このくらいのインセンティブを出す。ブルーカラーのマニュファクチュアリングについては成功したけれども、その次の付加価値ジャンルについて成功したかどうかというのはわからない、むしろアメリカの方が結果としてきめ細かかったんじゃないか。

きめ細かくならざるを得なかったのは、優秀な連中でいろんな人種がやってきた、しかもブルーカラーの時代と違ってあれやこれや理屈立てて言いますよね。言わないと、同じエリアに同じ者がそこらじゅうで存在してくる。IBMから集団脱走した連中がつくった会社がコンパックで、1兆円くらいの企業がわずか7年くらいでできちゃうから、やらざるを得なかったという背景があると思います。日本でホワイトカラーの流動化が本格的に進んできたのは、長銀とか北拓とか銀行系がひっくり返ってからだと思うんですが、その部分のことになるのかなと。

政務次官が言われたような感じで上と下がバツと分かされると、コンフリクションが物すごくあると思います。変われば必ずコンフリクションがあるかもしれないけれども、セーフティネットが整ってきて、まちを歩いていて危ない場所が減ってきているような感じがします。ロスの暴動みたいなものがまた起きると内紛でひっくり返っていくという可能性があると思いますけれども、今のところハーレムのスラム化している面積は、私、歩いていて思うんですが、減っているような感じがするんですね。

東京に来るとハッピーになれるという神話は絶対必要ですよ。今、ソウルの優秀な連中がいきなり西海岸とか、シンガポールの一番優秀な連中がいきなり西海岸、北京でも、上海でもそこらじゅう始っていますね。日本が派遣する数が少なくなって、むしろ逆転現象になっている。先月、北京で思ったんですけども、北京にしながら中国の人と香港の人と韓国の人とシンガポールの人が何で英語で、アメリカで習ってきた様式で話し合わなきゃいけないのか、結構情けないですよ。バブルのときにバークレーとかスタンフォードと同じような大学を自分たちでつくるか、あるいは丸ごと輸入するかやっておけば、彼らが向こうに行かないでこっちに来てくれれば、そいつらに金をガンガン投資していったんじゃないかと思うんですけど。

（座長）どうでしょうか。私もそうですが、日本の大学の先生方がいらっしゃいますし、アメリカの経験もおありだと思いますが、いかがでしょうか。

（D委員）お話、大変おもしろく伺ったんですけども、都市をどう設計するかという関連で伺いたいんですが、普通、ITだと分散化されているんですが、前回のお話のとき、必ずしも分散化はしないというお話が有力にあったと思います。今回のお話を伺って、例えばシリコンバレーという特定の地域に技術者たちが集まっている。シリコンバレーとは言えけれども、サンノゼー帯を中心とした人口集積地があらわれつつあるんですが、これは内部でのコミュニケーションをとるために都市計画にどういう工夫をしているのか。例えば、集積を増すような工夫をしているのか、それとも地価、オフィスレンタル料が高く、ある意味で集積を阻害しているようなことになっているのか、それが第1点。

第2点は、先ほどソーサリトでSOHOなんかが始まっているというふうにおっしゃったんですが、ちょっと格は違うけれども、時間的な距離でいえば、ソーサリトとサンフランシスコは荻窪と東京駅みたいな感じだと思うんですね。とても鎌倉の距離じゃない。だから、すぐそばのところで起きているということでソーサリトどまりで、とんでもない遠く、アリゾナまで行ってしまうわけではない。ところが、シリコンバレーとなるとかなり遠くて、筑波みたいな感じがするわけです。筑波にそういう集積があったとき、東京にバークレーとスタンフォードがあるのかどうか知りませんが、そういう大学とコミュニケーションをとろうと思ったら、ちょっと来ないですよ。こっちから行くときは汽車はだめでバスで行かなきゃいけないし、車も向こうから来るといったら大変な混雑ですね。シリコンバレーとサンフランシスコ周辺の大学やなんかとの交通関係、こういう事情はどうか、その辺を伺いたいと思います。

(A委員) 私、交通とITインフラと一緒にだと思うんですね。1時間くらいで行き来できるような感じのものができると全然違ってくると思います。私はC委員と年も近いし、一緒にやっているクリエイターも多いと思いますが、彼らがいつもそこだけでやりたいかという、必ずしもそうじゃないんですね。1時間とか、そのくらいで行ければ、そっちの方がいいねという話になるわけです。

イメージ的にですけれども、私が自分でやりたいなと思っているのは、軽井沢にあって今、神谷町に新しいオフィスをつくっているんですが、1時間くらいで行けるような感じにしたい。新宿を拠点にするのであれば、湯河原と新宿新都心のオフィスで、すいているときに行けば1時間15分くらいですが、そういう感じの形態を工夫していく方がいいのかなと思うんですね。

(D委員) そういう趣向の方がいらっしゃるというのはよくわかるんですけども、シリコンバレーとサンフランシスコ、あるいはバークレーとサンフランシスコ、これは1時間以内で行けるという感じですか。

(A委員) はい。

(D委員) 交通も混雑しないという感じですか。

(A委員) 交通はシリコンバレーの人口でかなり込んできましたし、地価が物すごく高くなっていますので、シリコンバレーという形の番地ではないけれども、その中間地帯にぼこぼこ勝手につくっています。

(D委員) シリコンバレーと大学とを結ぶ間ですか。

(A委員) シリコンバレーから30分ぐらい行きますと、ギルロイというニンニクとかレタス、「エデンの東」なんかの舞台になるような感じの農業集積地があるんですが、そこにオフィスが出てくる。

(D委員) 肝心のスタンフォード大学とかバークレーとの距離ですが、随分バークレーから人が行くし、学生もプレゼンテーションしに行く、それは1時間ぐらいですか。

(A委員) 1時間15分くらいですね、そのくらいの感じです。

(D委員) 混雑がなくて確実に着ける？

(A委員) 時間帯にもよりますけれども、その部分を外せばそのくらいでちゃんと行けます。90分が限界点だと思いますね。1時間から90分の中でほぼ行けるという感じのところ限界点になるかなというふうに思います。

(E委員) 私、サンノゼ市の都市計画でヒアリングしたことがあるんですが、都市計画で

特別なことをしているかどうか。特別なことかどうかわからないんですけれども、都市計画するとき、これだけ情報関係の集積があって、それはどう考えているか。皆さんはスタンフォードへ行っているいろいろ話を聞くでしょうけれども、我々はそういうところだけを見るんじゃない。実はあそこに地元の……

（D委員）サンタ・クララとか、サンフランシスコシティ、サンノゼキャンパスですか。

（E委員）そうそう。一流じゃないレベルですが、それが情報産業の下支えする人材を輩出する、当然ほかのところに比べれば高いと思う。そういうようなものをうまくバランスよく配置することが我々の責務で、単にあそこだけを突出するんじゃなくて、後方支援的なもの、都市計画的にそういう人たちのところにも支援する、そういうようなことを考えているんだとおっしゃって、印象に残りました。

（座長）ほかにいかがでしょうか。

（F委員）大変おもしろい話、ありがとうございました。

先ほど1,000万人単位で雇用がふえたり減ったりという話がありましたが、減った方ですけれども、いろんな理由があるのかと思います。日本との競争とか、そういうものもあったかもしれませんが、オールドエコノミーの方にも情報化がドライブしたようなビジネスモデルの変換によって人が減ったという要因はあったんでしょうか。

（A委員）eコマースはトヨタの生産方式みたいなものだったという感じで、情報化されることによって在庫は減りますし、ライン自体の効率が上がりますし、販売効率も上がるということで、今まで100人でやっていたところが50人くらいでいけるような感じのことになりますね。

アナログの時代も同じだと思いますが、最初にアナログ技術を支えるような形の鉄をつくってみたり、エンジンをつくってみたりという感じで技術系で出てきた。結果的には、テレビをつくる会社が最初の部分でいるけれども、今度は番組をつくる会社、あるいは「タイタニック」みたいなビデオをつくって、世界じゅうで1,000万本ぐらい売ってしまうような部分、電話をつくっている人とドコモみたいに回線のものが出てくると思います。今は、最初のアナログ時代のテレビをつくったり、電話をつくったり、ファックスをつくったりというステージから、その次の段階のサービスを提供する部分が出てきているという形態じゃないかと思います。

既存の中でIT技術を取り入れるということで行くと、IT教育に関して莫大な投資を使っているのは、飛行機会社が入り入れてみたり、自動車会社が入り入れてみたり、あり

とあらゆる業種でその技術を取り入れて効率化していく。結果的に、余った人のかき集めて、また違うビジネスカリストラになっていくという形態だと思います。

（F委員）情報化の陰の部分というか、都市を考える場合にはその部分が避けて通れない気がするんですね。

（局長）おもしろいお話を伺わせていただいたんですが、先ほどの新しい成功モデル、週3日ぐらいは自宅オフィス、リゾート地に住んで、お金持ちでいい暮らしをしている、若い人はそういうふうになりたいということでしたが、それを日本に引き直したときにどういうイメージが描けるのか。まさにサンノゼなりシリコンバレーですが、日本にどういう形で引き直せるか、どういうイメージで描けるか。

（A委員）さっき政務次官の話があったんですが、政経塾のとき私の1期上で、私、2期生だったので、いつも円卓で同じような議論をしていたんですけども、構想力勝負だみたいなのところがありますね。昔から話していたのと余り変わらないんですが、アメリカンドリームに対抗するジャパニーズドリームみたいなものをうそでもいいからつくってしまおう。万に一つでも成功事例があれば、それを見て、自分もこうなれるかもしれないという感じで頑張りますよね。そういうストーリーがつかれないかということをやっているんですけども、日本でストーリーをつくりにくいというのは、先ほどおっしゃられたような形で、1つは交通網の問題で、田舎の道路はよくなるんですが、都心の道路は一向によくならないという話になって、情報インフラだけできても交通インフラができないので、人と会うことができてこないということになります。

何よりもアメリカンドリームに対抗するジャパニーズモデルがつくりにくいというのは、アメリカの社会は、表から入ってきた全く色が違う人でも、話す言葉が多少方言のある英語をしゃべっても、成功して金をいっぱいまいてくれる人はいいい人なんですね。それはアメリカの陰の部分でもあると思うんですけども、リッチ・アンド・フェーマスの中身というのはものすごく詰めていくと、あの論法でいくと、男は金をたくさん稼いでいい人、貧乏人は悪い人みたいな感じで、物すごく単純化しているんです。異民族がいっぱいいるので単純明快にしないといけない。女の人には美人はいいい人だみたいな感じで、単純明快な論法でくるんですね。そうしないと、あれだけ言語系と背景が違う人たちを相手にできない。

ただ一点だけいいことは、結構拍手をしてくれる社会というか、野茂がアメリカに行ったときの談話が一番おもしろかったんですが、彼は「アメリカは人間関係が快適だ」とい

う言い方をしていました。日本にいとコーチがああしろこうしろと言う、そっちの方で
気を使うのでやりにくくてしょうがなかった、自分のペースで初めてやれますみたいなこ
とを言っていました。

日本の場合、ドリームをつくるというのがかなりしにくいことは事実ですが、東京
に来るとアジアの中で成功する率が高いとか、いいことがあるとか、東京へ行ってすご
くいい目に遭ったという話があれば人が集まってくると思いますし、全然別路線でハッピ
ーになれるコースみたいなものがあると 20 代とか 10 代のジェネレーションは元気になり
ますよね。

学力低下という感じのことが言われていますけれども、小学生から始まって中学生も全
部学力低下ですが、最大の理由は、出世の方程式が狂ってきているからだと思うんですね。
いい高校に行って、いい大学に行き、いい企業に行けばハッピーというものが崩れた段階
で、その方程式じゃない方程式をつくってあげればいいと思います。

ただ、ジャパニーズドリームのつくり方は、かなり荒削りで、最初に西部劇をアメリカ
の魂に仕立てたような感じで 20 代受けするような話がつくると大分様相が違ってくる
んじゃないか、こういうスタイルがいいというものが出てこないとなかなか元気が出てこ
ないということではないかなと思います。

（座長）そろそろ次の話へ移りたいんですが、お話の 1 つは企業モデルの部分ですが、企
業モデルを支えるためまち全体に一定の仕組みを持っている。サンノゼあるいはシリコン
バレー、そういう地域でまち全体に一定の仕組みを持っていて、それが新しいビジネスモ
デルをつくり出すベースになっていくかどうかという議論と、生活モデルという議論があ
って、生活モデルは、エリアの地域資源、あるいはそれ以後投資した道路インフラとか、
そういうものに起因しているところがある、そういう面で見ると日本はどういう生活モデ
ルを提供できるのかというのが大きな議論になる。

たまたまあるとき東京都の石原知事と東京のビジョンの話で議論したとき、石原知事が
残念そうに言っていたのは、石原知事は東京を中心に東京圏のビジョンをつくりたい、東
京都だけじゃないと言った、そのときに伊豆半島が東京圏に入らないのが非常に残念だと
言っていました。彼は、伊豆半島でヨットなんかをする、そのことを一つの楽しみに
していますから、それが非常に残念だというふうに言っていたのが印象に残ったんです
ね。彼はそういう生活スタイルを一つのモデルとして考えておられますが、そういう語れ
るような夢がこういうビジョンの中にあればお話のような議論につながるのではないかと

いうふうな印象を受けました。

時間がございませんので、次に移らせていただきます。次はB委員に、IT革命と都市についての関連で「情報化と都市」ということでお願いします。

(B委員)では、30分ぐらい説明させていただきます。

きょうお配りしました資料3というのがございまして、1ページから21ページまでございます。14ページから21ページはいろんな試算したものの抜粋でございまして、きょうは参考ということで、詳細を持ってきてないし、いろんな設定があってやっているものですから、これをやっていますと時間がかかりますので、参考の前までお話ししたいと思います。

初めの1枚目に「情熟都市(仮)」と書いてありますが、最近の流れの中で情報化が進むと都市はどうなるかということで検討してきたわけで、その中で言葉が要るだろう。情報化と成熟社会ということで情熟都市とつけてあるんですが、評判が悪いので仮ということにしてあります。意味は、情報化が進んで成熟社会になるとどうなるかを言いたい。それは冷たいものではなくて、あたたかいものである、情感がある、そういうニュアンスなんですけど、とりあえず仮をつけて置いておきます。2年前に成熟都市というのをつくったので、今度は違うものをつくったんですが、情報化と人と都市という組み合わせの何かがあるということです。

きょう出させてもらっているのは出版準備中のものの一部でございまして、そのストーリーを使っております、大きな3つの丸がございまして。1つは「情熟都市の成立」、2つ目は「情報化と成熟社会の接点」、3つ目は「20世紀・大都市の瑕疵、そして、21世紀情熟都市が生まれる」という流れでございまして。

3番目のところで詳しくご説明したいと思いますが、初めの方も簡単にやっていると、情熟都市がなぜ成立するか、4つございまして。1つは、IT革命によってリストライン・フリーになるということです。2つ目は、情熟社会における都市のパラダイムは何なのか。3つ目は、情熟都市といったときの空間的な圏域は何か、3つあるだろう。4つ目は、そういった中での都市運営はどうなるかということで、都市基盤と都市運営でございまして。

4番目の都市基盤と都市運営という部分は、前回、情報化は都市に影響を与えないというような議論もありましたが、私は都市側から見ていますので、何か影響があるのを出したいということで考えている中で生まれてきたのは、20世紀型の都市整備は基盤整備であ

った。情報化という 21 世紀の新しいツールは、こういった都市基盤ありきという都市の運営に影響を与えるのではないかという期待を込めているわけです。それがあつたので 14 ページから 21 ページまでいろんな試算をやっていますが、今回やつてわかつたことは、情報系のグループと一緒にやつたんですけども、我々と違ふことがあります。我々都市計画というのは、物を考えるとき時間設定を行います。5 年後、10 年後、25 年後、50 年後とか、短期、中期、長期みたいな話をするんですけども、私がつき合つた情報系のグループからは「情報化においては技術革新が激しくて時間設定は行えない」というふうに言われました。

確かにここに書いてあることはもう既に実現していることがいっぱいありますし、これを 10 年後という、もっと早いだろうというものがいっぱいあるわけです。ですから、きょう説明することにつきましては時間設定は置かないようにしています。物によっては現在進行、物によっては将来という部分があるというのが一点です。

あと、都市基盤に影響を与えるだろうという設定を置きながらやつていくと、通信なんかの総量がなかなかうまくいかないことがわかつてきています。情報化によって量が減るものもあるし、ふえるものもあつたり、新たな分野があるので簡単には出ない。ですから、個別项目的なあたりはできるということがありますが、そういう前提を置かして説明に入ります。

まず 1 枚目のリストレイン・フリーとは何か。これはさまざまにありますけれども、簡単にいえば 5 つぐらいあるだろう。ここに書いてありませんが、1 つは時間の自由度、2 つ目は場所の自由度、3 つ目は活動が制約されている人に対する自由度、4 つ目は使い方の自由度、5 つ目は出入りの自由度、こんなことを考えています。

2 つ目はパラダイムの方でございますが、「都市活動と都市空間の 3 つのカテゴリー」と書いてあります。要するに、情報化が進みまして、今までなかつた空間が発生するというのは現在の常識でありまして、特にバーチャルな空間ですが、その中で都市活動をどう考えるか。書いてありませんけれども、3 つ考えております。1 つは仮想空間でできる活動、2 つ目は仮想空間ではできない活動、3 つ目は、これは仮想か実空間かわかりませんが、情報化の進展に伴つて新たに活動が発生する、3 つあるんじゃないか。情報化の話はとても広範にわたりまして、考えていくと整理がつかないので、とりあえず 3 つに分けて活動を考えていますが、そんなイメージだと思います。

3 つ目は「情熟都市の地域 3 構造」とありますけれども、要するに、都市といった場合、

どういう規模の都市なのか、どういう発展段階の都市なのかということを言わないで都市というわけですから、議論は幾らでも広がるわけです。ですから、この話をもしやるのであれば、とても簡単ですけれども、3つの地域構造で言うべきである。1つは大都市圏、2つ目は通常の都市、3つ目はコミュニティー。我々がいう近隣住区ではありませんが、身近な意味でのコミュニティーと、50万から100万ぐらいの規模を持った都市、3つ目は何千万、東京の場合は3,250万という規模を持った大都市、グレードを分けないとこの話は難しいだろうというふうに思います。

4つ目の都市基盤の話は飛ばします。要するに、最後に幾つか計量分析していますので、まだ進行中ですが、こういうことがあって何らかの都市基盤が必要なくなるんじゃないかというふうに考えます。

2つ目の「情報化と成熟社会の接点」、きょう前半で情報化における企業の話がいろいろございました。これはさまざまある話で、個人の時代になるとか、企業もフラット化が進んでおりますけれども、さまざまな意思決定段階が変わってくるだろうという話、都市空間については、当然のことながらアクセスを含んだ需要と供給のカウントも含めて容量が変わってくるだろう、そういうことがあるというふうに考えます。

ここまで簡単にやりまして、3つ目、21世紀がもうすぐ始まるわけですが、情熟都市はどういうふうに生まれるのかという話に入ります。大きく3つ書いてありますが、大都市の課題とは何かという項目、2つ目は都市の課題解決と情報技術の動向、3つ目はシナリオ、そういう3つに分けてあります。

初めに大都市の課題とは何かということで、2ページ目をおあげいただきますと、大都市は、課題があって、問題がありますけれども、大都市運営上メリットがあるかというのがあって、その中で具体的に外部経済であります大都市の問題をクリアしなきゃいけない。そのときの課題は何かという考え方が2つあるといっていますのが2ページでございまして、1つはピークアウト型の課題です。特に高度経済成長以降、急速に一極集中が始まって、それに対して一生懸命都市整備を行ったわけですが、足りなかった。都市整備は整備量が足りないから常に整備するという流れで来ていますので、これについてですが、これがいよいよピークアウトする。要するに、2007年に日本の人口は頭を打つだろう、首都圏では2010年か2015年ぐらいにピークアウトするだろうということで、都市整備の量的な側面という考え方がどう変わるのかというのが1点です。

第2点はミスマッチ型の課題。個人の時代だとか、いろんな多様性が始まっているわけ

ですけれども、今まで考えてきた都市の基盤整備とか都市の施設というのは、実は思ったように使われていないのではないかと。とにかくつくればいいということでつくってきたものが思ったように使われていないんじゃないかということがあって、ミスマッチ型の課題がある。

ここで2つ考え方を持ってきました。いろんな考え方がありますが、とりあえず2つに整理してみたということです。

そういう中で、成熟社会と言われている意味は両方あります。要するに、成熟というのは、1つは、供給側の人口が減ってきて、今までのような拡大型の世界ではなくなっていくという話がありますし、もう一方では質の中身を問うという意味もありますから、そういうことを踏まえた上でピークアウト型の課題とミスマッチ型の課題が出てきたということです。

次の3ページへ行きますと、とにかく社会経済環境が変わっている中でいろいろ言われるわけでありまして、それをどう見るか。これもまた難題ではありますが、ここに書いてある表は、そういったさまざまなことを大きく4つの箱で見ようという見方でありまして、左側に書いてある部分でございます。

1つは、経済が低成長に向かうだろう。

2つ目は、ライフスタイルあるいは価値観が多様化している、あるいは多様化していく。

3つ目は、人口減少、この中には高齢化・少子化が含まれている。

4つ目は、とにかく開発ありきだった中で、今一番ブームになっているのはサステナブル・ディベロップメント、要するに持続型でないと開発できない。すなわち環境問題でございまして、環境に対する意識が高まってきているということで、おのおのに変化の度合いとか都市とのかかわり、いろんなことが書いてございます。

あと、それとはちょっと違う局面で、情報化と国際化という部分が今回のテーマですけれども、情報化、国際化でかかわってくるのは、右側の「都市との関わり」で書いてありますが、ボーダレス化とか、ネットワーク化とか、あるいは既存地縁、地面に根を張った組み合わせから、新規地縁、地面によらない縁、スーパーインポーズが始まるとか、フラット化、これは個性の時代もありますが、個対個の直結が始まる、こういうのがある。

この箱自体はそもそも余り論理的じゃありませんのでダブったりしていますが、まとめてみると、右側の「都市との関わり」という部分ですが、例えば経済の低成長では、新規開発や土地に対するニーズの軟化とか、あるいはライフサイクルコスト等がありますが、

こう流れていく。きょう前半であったお話は、ライフスタイル・価値観の多様化に関係があって、情報でいろいろ変わっていくだろうということですね。あと、高齢・少子化というのは、もう一方の大きなテーマでありまして、情報化を語るのであれば、高齢・少子化にどういうふうに寄与するか、寄与しないのかを言っておかないと、21世紀の都市について答えがないだろうと思います。環境も当然あるので、こういう流れの中で見ていく。そういう整理になっています。

4 ページに参りまして、都市の課題、いっぱいあるんですが、これもとりあえず箱をつくってみようということでつくった表でございます。この場合は、左側に活動領域を置いて、右側に空間レベルを置くという考え方です。活動領域も、幾らでもありますけれども、とりあえず置いてある項目は、居住、購買、就労、娯楽、交流、移動、学習、育児、癒す、こんなものがあるだろう。これを空間レベルで見えてみると、個人が住んでいる住宅、住んでいる地区であるコミュニティー、都市、圏域、こうなっていくだろう。

この中で、一極集中に伴う課題、情報技術の進展で解決できるものという組み合わせでつくっておりますが、黒い丸印は一極集中に伴う課題への対応としてあるもの、白い丸印はその他の対応、太字になっておりますゴシック体のところは情報技術の進展で解決されていくだろうというものでありまして、これは現在の情報化の進展の中で考えられているものをまとめてみたという作業でございます。

次に参りまして5 ページでございますが、今度は情報技術がどうなっていくか。要するに、今、我々が味わっているさまざまな情報化の組み合わせは、これからもっと情報化が進んでくと当然大きな変化を来たすことを期待したいわけですが、それが何かということについて考えています。

まず視点でございますが、ゴシックにしてありますけれども、一極集中に伴う課題、例えば居住水準の向上、オープンスペース・緑の確保、都市計画道路の整備や鉄道輸送力の不足、都市基盤整備のおくれ、主としてハード整備がよく言われていますが、こういうハード整備に対して情報化が何らかの代替ができるのかということが一つの期待になるわけです。それが恐らく情報化に期待されていることで、もちろん情報化のための情報基盤整備もあるわけですが、それは違うふうに考えれば、少なくとも今までのハードのよくない部分が情報化で多少できるんじゃないかという設定を置いて考えている視点でございます。

次、6 ページでございますけれども、既に現実に行われつつある部分の情報技術の例でございますが、都市から見た場合の課題が合っているかどうかという簡単なまとめです。

共通課題、これも情報関係の方のご意見をいただきたいんですが、情報技術に共通する3つのポイントとして、インターネットの高速化、低価格化、常時接続、2つ目は個人認証を含めたセキュリティの問題、それから使い勝手の向上、こういうことを踏まえた上で情報化があるだろうというふうに考えております。

そういう中で、S O H Oとテレワーク、eコマースと物流、総合交通情報システム、遠隔学習システム、遠隔医療システムについて簡単なまとめをしております。

初めにS O H Oとテレワークでございますが、「都市に及ぼす効果」、一番下のところに書いてありますように、都市の期待は、第5次首都圏基本計画でも分散ネットワーク化と言っているわけですから、それを具体化するものであるかどうか。それがS O H Oとかテレワークなのかという疑問はあるわけですが、一極集中型の都市圏構造を分散型に変える可能性を持っているかもしれない。同時に、通勤にかかわるトリップ数やピークを抑えることができ、その結果、交通インフラの整備コストの軽減がある。さらに、それに対してサテライトオフィスとかホームオフィスの施設整備は金額的には小さいものになりまして、仮に交通基盤整備のお金とサテライトオフィスとかホームオフィス等の整備費を比べると、100倍から1,000倍、もっと違いますかね、そういう試算もしておりますけれども、それはわかっております。

次、7ページに移りまして、今度はeコマースと物流システムです。都市に及ぼす効果で考えれば、eコマースをやるんですから当然買い物に行かなくて人が減るだろうというふうに考えますが、違う問題が発生していて、前回、前々回話がございましたように、eコマースで注文がふえて逆に交通量がふえてしまうという問題もあるわけで、情報化の話は必ずしもトリップ数を抑えられない。買い物に行くのは減りますが、配送が飛躍的にふえてしまうというアマゾン・ドット・コムの話がありまして、そういう側面もありますけれども、今言われていることは、買い物客の数は減るだろう。それから、単に物を売るだけの商店や商店街は、並べられる商品に限界がありますから、eコマースという電子媒体による多様性のある品物を見れば、そっちに行くだろうということで結果的に衰退する。同時に交流機能を持ったものが必要になる、これは当然のことです。

それから、総合交通情報システムですけれども、情報化に我々が期待する部分は、適切な情報を流したり、あるいは有料道路の支払い等、現在渋滞が起きているところを情報化が直してくれるようになれば、交通量のピークカットによって交通渋滞が緩和されるし、インフラの整備が現状のままだでも整備のコストを下げられるんじゃないかという期待があ

るわけですが、これも総量の問題があって、渋滞情報を流すとほかに車が行きますから、現状の道路のキャパシティの中で車を回すだけだと、結果的にはほかでまた渋滞が始まるわけです。ですから、そのあたりは必ずしも答えではないかもしれませんが、一つの効果としては期待できる。

8 ページに行きまして遠隔学習システム、これはさっきも出ましたが、要するに、最近、インターネットを使って大学の講義を行うということが起きているわけです。大学の立地ということが大きなテーマになっていて、首都圏でも工場等制限法の中に大学立地が制限されていたわけで、それが東京圏の分散に役立ったという側面もあったんですが、現在は都心回帰が始まって、郊外の大学は衰退しつつあるということで、立地が非常に大きいという話があります。情報化が非常に進み多くの部分が端末を使ってできるようになれば、常識的に考えれば、立地に伴う集積とか、交通の集中は分散させられるという仮説は成り立つ。

あと、社会人教育は、会社の帰りに寄るとかという話ですから、あまり効果はないだろうというふうに考えております。ただ、社会人の大学の現在の状況は、2 つに分かれていて、郊外型の大学は土曜日に大学院の講義を設置、都心型の大学は平日の夜に設置するという方向であります。郊外型の数がふえてくれば郊外での休日におけるトリップ数はふえるということが起きますが、通常のものを使うわけですから基盤整備上はあまり影響はない。

最後に遠隔医療・介護システムですけれども、これは強いていえば便利さが増すという意味で効果がある。今、都心に住むことのメリットというのは、さまざまなインフラのサポートがいい、この中に教育とか医療が入っているわけです。仮に、情報化をうまく使えば、遠隔地に住んでいてもバックアップができる。第 1 情報ですが、そういう部分があるので、そのあたりの効果はある。医療については、かつて三鷹市が I S D N で医者と患者のネットワークを結びましたが、最終的なケアができないといけないし、日ごろのケアのソフトがないとだめで、これは必ずしもできていないだろう。

こんなことで 5 つほど、ちょっと歯切れが悪いんですが、情報化で都市で何に影響が出るかをまとめるとこうなるということです。

次に、3 つ目に関連してきますが、大都市問題の解決に何かシナリオができるのかという部分でありまして、1 つは人と都市のミスマッチという部分についてでございますが、これについてどのような課題があるかというのを書いてあります。この続きは 11 ペー

ジからもう一回同じことが書いてありますが、それはブレイクダウンです。9ページからは簡単なタイトルで、11ページから中身になります。

9ページに戻りまして、3つ設定しております。1つはライフスタイル・価値観の多様化で、さっきアメリカ型の話もありましたけれども、アメリカ型という言い方の是非はともかく、個人活動あるいは個性を生かす部分が生活に入ってきますから、これに都市空間が対応しなきゃいけない。その中での幾つかの課題ということで、ここには4つ挙がっております。

1つは、公共空間の意味、だれにとっての公共空間なのかということで、ここに書いてありますように、世代で公共空間に対する考え方が変わってきているという部分があります。

2つ目は、ターゲットが不明確な空間は衰退していくわけですが、使われていない、それらの対応をどうするか。

3つ目は、都市ユーザーがこれからふえていくだろう。要するに、海外では当たり前ですけれども、弱い人がいればみんなで助け合うという障害者あるいは弱者に対する対応があって、施設の的にも進んできている、これは既に日本でも起きている。障害者、外国人が入っている中で、どういうふうに都市をこれから再生させるのか。

4つ目は、新しいワークスタイルです。モバイルもありますし、テレワークもありますし、SOHOもありますし、いろんなことで今までの大量集中的にサラリーマンが都心域へわっと通勤してくる、わっと帰るパターンが変わるという前提がもしあるのであれば、それに対して都市はどうこたえるか。というのがライフスタイル・価値観の多様化への都市側の対応です。

2つ目は、年齢構成の急激な変化ですが、高齢化が進むことで老人がふえてくる、少子化で子供が減っていくという人口構造の変化です。

そこに書いてありますが、1つ目は過剰空間と不足空間との調整です。既に起きておりますけれども、都心の区では小学校が廃止されていたり、それに対して高齢者施設ができておりますが、どのくらいの充足率がいいのか悪いのかといった部分については、縦割り型の部分がありまして、まだ本格的ではない。ですから、都市の中における過剰な空間と不足空間をどういうふうに調整するかというのが課題です。

2つ目は、高齢者にとってのバリアフリー化です。伺っておりますけれども、どこまでいけば便利なのかという課題があります。

10 ページに行きまして、3 つ目、今度は人口減少をどうするか。人口減少は、2007 年のピークアウトの後、外国人労働者が大量に入ってくなければ、確実に日本国全体で人が減っていく。ただ、首都圏に関しましてはまだ増加すると言われておりますけれども、それも 2015 年ぐらいだと言われておりますから、その点を考えていけばこの課題はある。

人口が減るとどうなるかという、今まで守られていた財政的な前提がふえるだろう。要するに、人が減ることは、すなわち入るお金も減るわけですから、インフラの整備というのがとても大きな課題になる。この辺は 2 年前に書いた本に詳しく書いてありますので余り詳しく言いませんが、要するに、空間ニーズと供給のミスマッチに的確に対応しないといけない。一つの答えはストックをどう活かすかということにいくだろう、あとは資源・エネルギーの有効活用ということです。

11 ページに参りまして、もう一回情報化とか技術の進展はどういうことなのかを考えたかどうかというのがここに書いてある 4 点でございまして、ニーズとシーズのマッチング、フレキシビリティの付与、空間のカスタマイズ、共の仕掛け、この 4 点を考えたかどうかということです。

まずニーズとシーズのマッチングですけれども、今の都市施設というのはある程度単一機能の前提でつくっている部分が多いわけですが、さっき申し上げました空間の使い方が多様化してきている中で、施設とか空間を供給する側が多様性を真剣に考えているのかというところの話です。マッチングがないと、つくってもうまくいかないだろう。その中に、情報系でいえばインタラクティブな情報システムやモデムシステムを都市空間のさまざまなレベルでビルトインしておいて、ミスマッチが起きないように常にニーズとシーズに立ち返るという仕組みに情報化を使ったらどうかという話です。

2 つ目はフレキシビリティでありまして、同じつくったものでも、施設とか、設備とかサービスを状況によって変えられる空間をつくれるか、その中で情報化あるいは情報技術がうまくかわれるか。

3 つ目は空間のカスタマイズであります。カスタマイズというのは、自分たちが好きに変えていくということであります。よく言われる空間カスタマイズの是非のエリアは、我々都市計画の分野では新都市建設というのがありまして、例えば筑波をつくったとき言われたことは、赤ちょうちんがないとか、都市というのは隠れている場所があって、隠れている場所で人々は通常の活動以外に楽しめる、都市計画の連中はそういうことがないじゃないかというせりふは一般的にあります。ブラジリアに行けばわかりますけれども、ほ

とんどそういう場所がなくて、遊びたい人は、ブラジリアじゃなくて、ブラジリアの郊外にある昔からの都市へ行って遊んでいるということになる。

その答えは、空間というのは提供しますけれども、使う側は人間で、人間がそれを変えればいいんですね。ということは、変えられるように空間を提供しなきゃいけない。そういう部分がカスタマイズで、人々が使って、変えられるようになっている部分を含めた空間を提供することが必要である。

最後は共の仕掛けですけれども、今まで都市というのは地縁社会が前提で、都市社会学的な視点から見て明らかなように、コミュニティーの理論というのは、地べたがあって、地縁社会で始まる、長く日本の流れの中で地縁社会があった。現在起きていることは、地縁とは関係ない人間関係、インターネットも含めた情報化の中で、今までの地縁に立脚しないということが起きている。それをどのくらいお互いにうまく結びつけるのか、現段階でまだ答えはないと思います。犯罪にしても地縁社会を離れた部分で起きていますから、地縁社会型の犯罪に対しての警察を含めた組織は対応できないことが起きているわけで、このあたりのお互いの仕掛けをどうするのかというのが大切な視点になるだろう。

そういう中で、さっき言ったライフスタイル・価値観の多様化、年齢構成の変化、経済の低成長でもう一回考えてみようということでございます。

まず公共空間の意味の話でございますが、これは羅列したものでございまして、これが正解とは申しません。こういうのがありますという幾つかの部分でありまして、公共空間の意味の変化につきましては3つ書いてあります。

1つは、利用者モニタリングによる公共空間の性格の明確化。今、空間がどう使われているか、提供した側はだれも興味を持っていないですが、それをどのくらいモニタリングするか。

2つ目は、公共空間の明確化とその情報のパーソナルメディアへの提示、これは特に若い世代に対しての対応です。

3つ目は、パーソナルメディア等情報交換による公共空間の明確化・重層化。今、インターネットを含めた交流が始まっていますけれども、これが都市空間にどうおっこってくるのか。

このあたりが公共空間の意味の変化、特に情報化を含めて考えた場合のテーマだろう。

2つ目は、ターゲットが不明確な空間の衰退への対応。今、端的に言えば、中心市街地が衰退して、その対応をどうしようということがございますが、利用する側から見た必要

な空間に変われば良いだろうという考え方です。マイ空間化、若者が好きな自分たちの手づくりでいくような発想です。中心市街地、特に商店が衰退している原因は、郊外に大型店舗ができたこともありますけれども、そもそもそこで売っている人は、行けばわかりますが、勝手に売っているようなところがありますから、利用者というか、購買層との交流がなくては存在しないということです。

それから、新たな都市ユーザーへの対応につきましては、2つ書きました。

1つはパーソナルメディアを利用した都市情報、現在既に行われている部分もありますが、これをさらに進めていこう。

12 ページへ参りまして、2つ目は、自己情報の提示に対応した適応都市サービスやその情報の提供。これは、情報化が進む中で、都市においてサービスを受けるとき、どのようなメニューがあるのかという具体的な話も入っているだろうという前提です。

それから、新たなワークスタイルへの対応につきましては、これは情報系の方のテーマだと思いますが、今は確かに情報化が進んでインターネットができて便利になりましたが、一体これは何なのかというのは答えはないわけで、我々の経験からいうと、OA化が進むとかえって忙しくなる。かつてマッキントッシュがあらわれて、やってなかった作業が発生した。要するに、今までやっていた分析よりもっと多くをやり始める、結果的に作業はふえるんですね。そういう目に遭っていますから、情報化で必ずしも楽とはいいいませんが、時間の有効活用ができるのかということ、両面があるわけです。そういう意味で、ワークスタイルに合った情報武装就労空間は一体何なのかという答えはない。

年齢構成の急激な変化（高齢・少子化）でございますが、過剰空間と不足空間については、さっき言いましたが、利用可能なものを調整するということで、死に筋空間を出さないようにする。死に筋という言葉はおかしいんですが、都市の中で幾つか死んでいる部分がありますから、死に筋空間をいかに減らすかということです。

次、高齢者にとってのバリアフリー化。2つございまして、パーソナルメディアを利用した都市情報の取得モード、さっきあった弱者の部分と、自己情報の提示に対応した適応都市サービスやその情報の提供。

次、経済の低成長でございますが、端的にいうと、新規開発に飛びつくんじゃなくて、今あるものをどう使うかを真剣に考えないともたないということで、そこに書いてあるように、今あるものをどう使うかという話です。

13 ページへ参りまして、例えば空き家とか空き地情報がリアルタイムで行えるような話

ですが、最近、不動産業界でも全国ネットでやっていますが、そのあたりです。

環境意識は、項目として挙げてあります。

あと、参考でございますが、何をやったかだけ言っておきますと、情報通信技術の進展で日常生活にどう影響するかということをやって、「都市構造等への影響」を右側に載せていますが、計算しましたものは移動量、床需要、空間配置等々、これが 14、15 とございます。

16 ページは、情報通信技術の進展によって企業行動がどう変わるか、これも「都市構造等への影響」という右側で幾つか計算しております。

17 ページは、情報通信技術の進展によって何がどう変わるかを試算したものでありまして、薄く網がかかったところが試算した部分です。

結果は、18 ページから書いてありますように、家事時間・在宅時間の減少による主婦のトリップの増加、自動運転道路システム等々のトリップの増加、e コマースによる配送、購買。さっき言いましたように、e コマースは、配送トリップは増加、購買トリップは減少する。それから、テレワークの普及、インターネットの普及。

まとめたのが 19 ページの表でございまして、とりあえずまとめると、こんなことになります。初めに申し上げましたように、都市の総量でやったわけではなく、個別テーマでやるとこうなるということです。

20 ページは、床面積の方で、一番大きいのは、情報化が進めば当然ながら基盤整備あるいは床面積が減らないとおもろしくないんですね。どんなことかということでやったのがこの試算で、テレワークの普及によるオフィス需要の減少、e コマースによる商業需要の減少、21 ページの在庫日数の減少、そんなことをやっております。

この試算についてはかなり強引な試算でございますので、参考ということで……。

(座長) どうもありがとうございました。

それでは、余り時間が残されてなくて 15 分程度ですが、今の報告についてご質問、ご意見をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

B 委員の基本的な考え方は、冒頭にピークアウト型とミスマッチ型、大きく 2 つの課題を掲げておられますが、ピークアウト型の課題というのは、これまでの都市づくりの中で基盤整備、その他で十分されてこなかった部分が現在でも残っている、その部分については 6 ページ以降の議論で、情報化の中で対応できる部分があるのではないかと考えています。

もう一つ、新しいニーズが生まれてきて、それに対して現在の都市がミスマッチを起こしている、そのミスマッチに対応するような技術としてITがある……

(B委員)あと情報化がある。要するに、都市の課題は、言い方はおかしいけれども、基盤整備、土木事業をしないでできるのか。

(座長)後者の議論で興味があるのは11ページ以降ですが、ここで言っている公共空間というのは一体何なのか、よくわからないんですね。私なりに考えたのは、コミュニティーの問題はコミュニティーの空間の中で、例えば高齢化とか、そういう問題はコミュニティーの単位で議論してもいいのではないかという感じがあるんですが、ここで言っている公共空間は、そうではなくて、不特定多数が出歩く空間はコミュニティーに縛られない、あるいはコミュニティーが対応できない空間が都市、特に大都市の場合はあるわけですね。そういうものについてITを活用したさまざまな情報を提供することによって、高齢者あるいは障害者、新しいニーズを持った若者、その他、新しいニーズに空間が対応していくというストーリーかなと勝手に読んだんですが、そのような理解は間違っていますか。

(B委員)ここの公共空間は定義してないんですが、情報化の話は、初めに考えたのは住宅とコミュニティーと都市と都市圏という設定ですが、いざ始めてみるとパーソナルメディアを使っていますから人はどこでもあらわれるんですね。それを公共と呼べるかどうか、今おっしゃった話でいくと、公共という言葉は、都市空間全体の中で個人認証が決まっていけない場所というふうに考えました。

(座長)個人認証が決まっていけないか、コミュニティーに支えられない部分を公共空間というふうに言っているということですね。

いかがでしょうか。

(G委員)一つ質問させていただきます。

18ページ、「家事時間・在宅時間の減少による主婦のトリップの増加」と書いてありますが、一つ目の質問は、こういった主婦たちはどこへどんなことをしに行くのか。さっき買い物は減るだろうということでしたからデパートへ行くわけでもないし、習い事をしたり、いろいろするのかなと考えておったんですが、具体的にどういったものなのかお教えいただきたいというのが1つ。

それから、大学は郊外へ出て問題ないということですが、私の経験では、学生というのは遊ぶ場所、アルバイト先、または文化に触れるということで、常に真ん中にいたがるんですね。つまり、大学が郊外へ移ったケースはろくなケースじゃないというのが経験上

あるわけで、大学の立地というのは中心から絶対動かないんじゃないかというのが私の考えですが、いかがでしょうか。

以上２点、お願いします。

（Ｂ委員）初めの方は、一番あるのは、買い物じゃなくて、カルチャーセンター的なもの、要するに自分の趣味に時間を使うということが一般的に言われていて、それがどのくらい発生するかというのはわかりませんが、１日に何回か出るという設定になっています。それは、環状方向の交通網ができてくれば、川越にいる人がきょうは茅ヶ崎に行きましょうみたいなことで何かを味わってくるとか、今までなかった新たな事象が発生するという部分があります。

買い物はｅコマースで減ると言っていますけれども、もう一方で私は減ると思っていないくて、逆にそうでないものがあらわれるだろう。要するに、ｅコマースでできない買い物がいっぱいありますよね。ウインドーショッピングというのは一つの趣味ですから、そういうものが発生するので、ここはここで増加させる要素が強いだろうと思っています。今おっしゃったように、人は自分の楽しみを得るために動きますから、自由になれば絶対動くということで考えると設定がちょっとあれですが、広い意味で、買い物だけじゃない、文化的活動需要がふえるという勝手な設定です。だから、この数字については、設定ですから余り突っ込まないでください。

２つ目の大学の話は、私はこう思っているんです。現在都心の大学にいるわけですが、学生数は減らないでふえている、一方で郊外型は圧倒的に減っているわけです。これは政策的なものが背後にあって工場等制限法で出したわけで、大学の方でもってやったわけではないですね。大学のことを思ってやったわけではない政策ですから、それを言っても始まらなくて、現実は今、都心回帰です。おっしゃったように、大学というのは、学問だけじゃなくて、付帯したさまざまなものがあって、現在の学生は、アルバイトをやっているので雇用機会があるところ、遊ぶところに集まるわけですから……

（Ｇ委員）配送などのアルバイトですね。

（Ｂ委員）あれは時間単価が高いですから。

大学の立地に関しては、今の政策自体が違うことをやっているという前提じゃないですか。

主婦のあれは、どういう中身なのかというのは真剣にやらないと難しいですね。

（Ｇ委員）失礼なことを言わせていただければ、戦後行われた家電製品やその他のいろん

な発明は、主婦の時間をどんどん減らすのに使われていたような気がするんですね。おっさんの方の時間は全然減らない。男性の方の時間がもっと減るという逆の観点はここに書かれていないんですが、そういうのはないですか。

（B委員）その部分は外しちゃっているんです。それは企業側の話で、企業側としてどういう労働時間の設定を労働者に要求しているかという話になってくるんですね。

（G委員）さっきのA委員の話ですが、もっと個別に対応して、あなたはこうだから週3日だけでいいとか、そういう感じに東京が本当になるとお考えですか。

（A委員）なるというか、かなりなっている会社は出てきているんじゃないですか。付加価値の部分だと、その日は16時間ぐらいやっても、休みでも、アウトプットが同じであればいいという感じの観点でいけばそうなりますし、作業的にも、実際のところは時差がありますので、夜中1時からイギリスのオフィス、私どもでいくとオレンジカウンティを稼働させますので、そっちでつくったデータをこっちに送り込んで、翌日やるみたいなものを行っていますので、現実になっていますし、もう少し進んでいるところは、インドの拠点か上海拠点を持っていると思いますので、結構動いている。

勤務時間の形態を9時から5時とか6時という感じだと、効率は實際上悪いと思うんです。コアタイムは決めておいた方がいいと思いますが、それも週に何回かで、事前にメールで配っていますので、事前にやりとりしながら、集合でやるコアタイムがあるという形だから、時間はとりあえず24時間型になってきているんじゃないか。

（G委員）全産業の何%ぐらいがそのようになるとお考えですか。

（座長）いつまでですか。

（G委員）構造的に無理なのがありますでしょう。例えば、ピザを届けるなら、ピザを届ける時間じゃないと絶対だめなわけで、ずらすわけにいきませんから、今、A委員がおっしゃったのは、IT産業といいですか、いわゆる先端技術に限られているわけで、全体の産業からいえばごく一部じゃないか、それをもって東京全体の構造が変わっていくのかという問題です。

（座長）例えば、東京の渋谷あたりにはそういう企業がかなり大量にクラスターを形成してきている部分がありますが、そうするとそれを支えるサービス産業もまた別のスタイルになる部分が当然あるわけです。ある一定のエリアそれが出てくれば、それはそれなりに一つの都市になるとと思いますが、トータルにどうかという数字はなかなか難しいと思います。

（Ｂ委員）初めの質問ですが、この根拠は総務庁の社会生活基本調査報告で、25歳と60歳の職業を持っていない女性の1日当たり使用時間は、買い物が59分、家事は274分です。情報化で減るわけではないという前提がありまして、毎日外出できることにはならないだろう、その中の5割は情報活用派、さらにその中の1割がこの影響を受けて外出する人だろう。結果は週1回程度、内容はパート勤務、カルチャースクール、スポーツ教室、ボランティア活動、何らかの対応という想定で行った結果であります。恐らくもうちょっとふえています、そうするとこうなるという計算でございます。

（Ｈ委員）先ほどeコマースで都心の商業行為といいますか、買い物行為が減るだろうという話ですけれども、5年前から毎年、インターナショナル・ショッピングセンター協会（ＩＣＳＣ）のコンベンションがラスベガスで続けられて、5年前ぐらいから言われているテーマがそれなんです。私どもショッピングセンターをやっている連中の興味は、eコマースによってショッピングセンター来街者が減るんじゃないか、それは先ほど言われた都心に買い物に来ることが少なくなるんじゃないかということと裏腹の現象です。

盛んに言われていたんですけれども、情報化をもって伸びる小売店もあるだろう。しかし、我々が求めているものは、ショッピングセンターの快適性とか、サービスとか、そこにおけるコミュニケーションのもとに豊かなライフスタイルの提案をするわけだから、それさえきちっとやっておけば大丈夫だというのが主流なんです。

結果的に5年ぐらいたって見たら、例えばGAPとか、今、日本で最先端を行っているのはユニクロさんですね。インターネットでドーンと打ち出す、しかし1週間後は店頭で1,900円で売り出して、1,300円にする、それで何百万着売ってしまう。そういう企業は伸びるんですが、しかしまちに何を求めて来ているのか。例えば、私どもみたいなショッピングセンターのまちに何を求めて来ているのかというと、そこにはコミュニケーションとか、人との触れ合いとか、豊かさを感じるような時間を求めるとか、五感に感じさせる時間を過ごすために来る。先ほど奥さんは何をするのかという話でしたけれども、都市というのはそういうものだろうということでした。

（座長）その辺はＢ委員、どうですか。

（Ｂ委員）情報化の話でつくづく思うのは、我々都市計画では人間を置き忘れたりとか、そんなことがありましたが、情報化もそういうのがあって、どう考えても人間の五感を無視できないだろう。情報化は五感を満足できれば大体可能でしょうけれども、そうじゃない部分がある。それは初めに申し上げた3つの話があって、仮想空間でできるものとき

ないもの、情報を伴うものと3つに分けて物を考えるべきで、仮想空間で済むものは、実は少ないかもしれないと私、思っています。初めは珍しいですけれども、だんだん合ってくると仮想空間では満足できないというのが結果的に情報化の行き着く先だろう。そうすると、前回出たような情報化は都市を変えないという話になってしまうんですが、その前に幾つかは変えられるだろうというのを我々の立場としては置いておきたい。

(D委員) 今、H委員がおっしゃったユニクロの例ですけれども、あんなに人間的触れ合いのあるところはないんですね。ユニクロに行ったら、女の子たちはユニクロの洋服を着ていて、いろんなファッションをこういうふうにできるんですよということを宣伝している、お客さんにそういうメッセージを発信しているわけです。ユニクロの客の世代と同じ子たちが店長みたいなことをやって活躍している、これはロールモデルですね。若い人が自分は3年ぐらいにこういうことができる、仲間とすごく楽しくやれる。ITを十分活用したところだということは事実だが、人間的なものと組み合わせてうまくいっている。

その意味で僕はC委員の説に賛成で、ITがどちらの方向に都市を変えということはない、どちらの方向に変わるかよくわからない。その際に政策当局にとって一番肝心なことは、どちらに行こうと人々が望むような方向に障害にならないようにする。要するに、社会主義みたいにここに日本でもシリコンバレーをつくるんだとか、ITだから郊外化しなきゃいけないとか、そういうことを考えない。都心化しても、郊外化しても、どちらでもやりやすいように、今までは大学が都心に帰ろうと思ったらできなかったわけですが、そういうことができるようにする。

郊外化の例でいえば、今、国際基督教大学で非常勤をしているんですが、物すごい勉強するんです。郊外で都心から離されていて、女の子たちはお化粧も何にもしない。いってみればアメリカのスラスモみたいな感じ、ほんとにそうです。それは、郊外にあって、あるレベルの学生がいるからできるんですね。そういうのがあっていい、都心に来るのもあっていい。いろいろあって、邪魔するなということがいいのではないかな。

(座長) I委員、モバイルについてご関心があるようですが、いいですか。

(I委員) 特にないんですけれども、全体の話で私、ちょっと違和感があるのは、幅というんですか、ディストリビューションのある話で、分布、特にすそ野が広い話にITがあって、ITが起こると何が起こるかというような話に全部帰着しているような気がするんですが、非常にまずいんじゃないか。

例えば、ITが今、アメリカの中でどこで伸びているかというと、低所得者で非常に伸

びているんですね。なぜかという、ただでやれるエンターテインメントといったらITしかないからです。そうすると、ITは高所得者と低所得者で中抜き、真ん中がないという状況になってきている。そういうふうになっていくと、ITでどうのこうのというよりも、ITがどのセグメントにどういう影響を及ぼすかということを考えてやらないとだめだろう。そうすると、政策そのものも、さっきのD委員のお話じゃないですが、コンディショナルな政策しかできないだろう、条件つきですね。こういう条件を持ったときにこういうことをやれる、そういう政策のメニューをたくさんつくっておいて、それに対して何か起こったときに対応できるというようなシステムにしておかないと、さあITだ、みんなITだ、何でもかんでもITになってしまうというようなスタイルだと、とんでもないものができてしまうという気がします。

(座長) それでは、時間が若干過ぎましたので、きょうの研究会はこの辺で終わらせていただきたいと思います。事務局で何か。

(事務局) 資料4にございますけれども、次回の会合は11月7日、来週の火曜日12時から14時ということで開催されます。少子高齢化と都市ということで、J委員とK委員からお話いただく予定になっております。

以上です。

(座長) よろしく願いいたします。きょうはどうもありがとうございました。

以上

問い合わせ先					
経済企画庁	総合計画局	計画課	課長補佐	増島	03-3581-9380
経済企画庁	総合計画局	経済構造調整推進室	前川		03-3581-0783